

チェルノブイリ・ヒバクシャ・救援関西 発足27周年の集い

報告

チェルノブイリとフクシマを結んで

支援と交流を拡げよう！

フクシマを核時代の終わりの始まりに

12月9日、約40人が参集、発足27周年の集いを持ちました。

代表の山科さんは、開会の挨拶で「私の体にはまだヒバクの影響が残っている」と話し始められ、長崎での被爆体験と生涯をかけた核廃絶運動を辿り、「みなさんと一緒にチェルノブイリとフクシマの原発事故の被害者に寄りそっていきたい」と、今なお強い活動への意志を示され、大いに私たちを励ましてくださいました。

事務局からは、基調報告として今年の活動の振り返りと来年に向けての提案がありました。

次に、秋のベラルーシ交流訪問の報告。今回のベラルーシやロシアの事故被災地との交流は、前々から希望していた福島の方々との訪問がやっと実現したものです。

救援関西は「チェルノブイリとフクシマを結ぶ」という思いを掲げて、フクシマ事故後、ベラルーシやロシアのチェルノブリ被災地からのゲストに福島を訪問していただき、各地でそれぞれの体験を基にした深い共感をとまなう交流が行われてきました。今回ついに福島の方3人がベラルーシとロシアを訪れることになり、32年後の被災地を巡り、かの地の被害者の生活を目の当たりにし、様々な感慨を持ち帰られました。行く先々で3人は福島から持参したお土産「あかべこ」を差し上げられたので、「あかべこ訪問団」と（田中が勝手に）名付けました。

まずは同行した振津さんから日程に沿って訪問交流の概要説明がありました。例のごとくのギッシリと詰まった旅程ですが、今回は参加される3人からの欲張りリクエストを受けての計画でもあった、とのことでした。

集いに福島からは3人のおひとり佐藤龍彦さん（檜葉町）が来阪され、「まだまだ整理ができてない」「あまりにも思うことが多い」とおっしゃりつつも、初めてのベラルーシ訪問について語ってくださいました。

チェルノブイリとフクシマを結ぶ交流は、距離の遠さやそれぞれの地域の事情や優先すべき活動があり、ゆっくりとした進行しか望めませんが、一步一步を大切に、確実に結びつきが広がっていくよう、これからも粘り強く頑張っていきましょう。（田中あ）



チェルノブイリとフクシマを結んで ～今年の活動を振り返り、来年に向けての提案～

<核被害者＝ヒバクシャの共通の想いを改めて確認>

今年は特に、チェルノブイリ・ヒバクシャとともに、核被害者＝ヒバクシャの共通の想いや連帯の意義を再確認できた年でした。

8月にはベラルーシの「移住者の会」代表ジャンナ・フィロメンコさんが、原水禁の招へいで、広島・長崎の世界大会に参加しました。私たちはその招聘をサポートし、一緒に広島・長崎の大会に参加した後、福島の前線地も訪れフクシマ事故被害者の方々と交流しました。「チェルノブイリ被害者の次世代の健康が心配。日本の被爆者の次世代のことを知りたい。」というジャンナさんの希望もあり、長崎では「全国被爆二世団体連絡協議会」の方々と交流しました。これらの交流を通じて、核被害者＝ヒバクシャの共通の想い～事故さえなければ、自分たちのみならず子や孫も含めての健康不安、故郷を奪われコミュニティを奪われた辛く苦しい体験、そして二度と繰り返してはならないという強い想い～を、私たちも改めて認識しました。

また今年は、ベラルーシ、ロシアへの訪問は4回に及び、特に4回目は「救援関西」として初めて福島の前線事故被害者の方々とチェルノブイリ前線地を訪れました。チェルノブイリの経験をフクシマに生かし、事故被害者同士の交流を深めるためです。

福島訪問は、3月に「救援関西」のメンバー4名で8年目を迎えた福島を訪れました。楢葉町で行われた「県民大集会」への参加、浜通り・飯館村の前線地を訪れ、複雑で深刻なフクシマの現状の一端に触れる中で、前線事故の爪痕の深さを改めて感じ脱前線への想いを新たにしました。

これらの取り組みを、被害者の人権と補償の確立、そしてこれ以上核被害に苦しむ人を生み出さない運動の前進につなげていきたいと思えます。互いに「顔の見える関係」を大切にしながら、ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリ・フクシマを結んで、さらに支援・交流の輪を拡げ深めましょう。そして、次の節目の年である2021年の「チェルノブイリ35年、フクシマ10年」に向けて準備をしていきましょう。また、チェルノブイリ・フクシマを繰り返さないためにも脱前線の運動にも引き続き取り組みましょう。

<チェルノブイリ前線地で—今も続けられている被ばく防護と健康管理>

チェルノブイリ前線地では、今も人々が住めない広大な高汚染地があり、「居住地域」にもホットスポットが散在し、「放射能汚染と背中合わせ」の生活が続いています。30年以上にわたる被災住民への低線量・低線量率被ばくの健康影響は、今後さらに顕在化する可能性があります。そのような中で被災地では、住民健診、体内放射能測定、食品の放射能汚染測定（ベラルーシでは全国で）、子どもたちの非汚染地域での「保養」、等々、被ばく防護対策、放射能モニタリング、健康管理が現在も続けられています。

<フクシマ事故前線地で—事故収束のない中、進む被害者支援の切り捨て>

フクシマでも放射能汚染により人々の生活が破壊され、自然も汚染されました。事故から7年9ヶ月経つ今も、福島県が公表しているだけでも4万人を超える（2018年12月5日現在、県の公式発表：県内10,054人、県外33,147人）人々が故郷を離れ、避難生活を余儀なくされています。

事故はいまだ収束せず、「原子力緊急事態宣言」は解除されていません。放射能は地下水・大気に漏れ出しています。デブリの取り出し、廃炉への道筋は見えず、困難を極めています。また、たまり続けたトリチウム汚染水の海洋放出を進めようとする東電と原子力規制委員会に対して、公聴会では地元住民や市民運動からの批判が続出しました。

被災地では国や自治体、マスコミなどによる「安心・安全」「復興」のキャンペーンが強まり、放射能の危険を心配する人々がそのことを話題にするのも憚るような雰囲気広がっています。政府は「復興の本格化」の名の下に、帰還困難区域を除き「年20mSv基準」での避難指示解除を

行い、住宅支援や賠償の打ち切りなど、被害者支援の切り捨てを進めています。

<被害者支援の切り捨てに反対し、フクシマ事故被害は「なかった」ことにする「放射線のホント」撤回を求めましょう>

今年3月、復興庁はパンフレット「放射線のホント」を作成し、すでに2万2千部が配布されています。このパンフレットは「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略」に基づき情報発信等のモデルとして作成されたものであり、10月には文科省が小中高「放射線副読本」の再改訂を行うなど関係府省庁をあげてこの「安全宣伝」「復興宣伝」に取り組んでいます。「風評」や被害者へのいじめ・差別の原因を放射線の正しい知識不足や福島の実況の情報不足と決めつけ、その大本である原発事故を引き起こした国の責任や事故被害者への補償、健康保障などには全く触れていません。問題をすり替え、事実を隠蔽してごまかし、被害者への支援策を切り捨て、2020年の東京オリンピックまでに「フクシマ事故は終わった」ものにしようとしています。引き続き「放射線のホント」撤回の全国署名に取り組み、このとんでもないパンフレットを撤回させましょう。

<保養で「普通の生活」を取り戻す>

市民が中心になり、「被災地の子供たちの被ばくを少しでも減らしたい」「放射能汚染の中での生活から（一時的でも）解放しよう」と、チェルノブイリの経験にならい、全国でフクシマの子供たちの「保養」受け入れに取り組んできました。未だに子供たちの身近な生活環境の中にホットスポットが存在し、特に自然豊かな山や森はほとんど除染もできないままです。「保養」は、子供も親も、放射能汚染と被ばくを心配せずに、自然とふれ合いながら過ごす「普通の生活」を取り戻すためにも重要な取り組みです。このような「保養」は、本来なら国が責任をもって被災地の全ての子供たちに保障すべきです。

「救援関西」も、関西の仲間とともに「保養」受け入れにささやかながら協力してきました。今後も引き続き協力すると同時に、ノボ・キャンプへの視察・交流など、チェルノブイリ被災地で長年にわたって行われているユニークな「保養」からも直接に学ぶような企画も考えたいと思います。

<国の責任でフクシマ事故被害者に「健康手帳」交付、生涯の健診・医療等の保障を>

福島県県民健康調査では、事故当時18歳以下だった子どもたち約30万人のうち、すでに202名が甲状腺ガン・疑いと診断されています¹。多くの子どもたちが何ら防護されることなく放射能プルームに曝され被ばくした事実があり、「事故による被ばくの影響」を否定することはできません。原発事故がなければ、これだけ多くの症状もない子供たちが甲状腺検査を受ける必要はなかったのです。甲状腺ガン・疑いと診断され、経過観察や治療が必要となった子供たち全員に、国の責任で医療支援を行うべきです。さらに事故による被ばくを強いられた全ての人々に、国の責任で「健康手帳」を交付し、生涯にわたる健診、医療等を保障すべきです。

<チェルノブイリ法、ヒロシマ・ナガサキの被爆者の闘いに学ぼう>

チェルノブイリでは、放射能と被ばくの影響を懸念する専門家などの働きかけや、リクビダートルや汚染地住民の運動を背景に、1991年に「チェルノブイリ惨事により放射線に曝された市民の社会的保護」（チェルノブイリ法）が制定されました²。この法律は、原発重大事故の被害者の権利を国家が保証することを具体的に定めた、世界で初めての法律です。社会制度の違いや事故後の歴史的経緯などの背景を理解した上で「チェルノブイリ法」に学び、フクシマ事故被害者の「生命と

¹—巡目（2011-13年）：300,476人中、悪性・疑い：116人（うち一人は術後に良性と診断）、手術：102人。
二巡目（2014-15年）：270,540人中、悪性・疑い：71人、手術：52人。三巡目（2016-2017年）：217,506人中、悪性・疑い：15人、手術：11人。（2018年6月末現在）

² 1991年8月のソ連崩壊前、2月にベラルーシ、ウクライナ、次いで5月にロシアで制定。それぞれの国で具体的な支援策の内容、またその後の法の変遷にも違いがある。

健康の保護」を国の責任で具体的に行わせていくための運動に活かしていくことは重要です。また日本では、核の軍事利用の被害者である、ヒロシマ・ナガサキの原爆被爆者が長年にわたって権利としての援護、「国家補償に基づく被爆者援護法」を求めて闘ってきた運動と成果に学ぶことも重要です。

<「救援関西」に引き続きのご支援とご協力を>

「救援関西」の支援・交流資金、運営資金は、全て皆さまからのご支援・ご協力のみで成り立っています。(現地訪問の旅費などは、基本的に「自腹」です。)今までも救援バザーに取り組んだり、カンパの願いを繰り返してきましたが、資金繰りはかなり厳しく、今年も例年通りのささやかな現地への支援を継続するのもやっとという状況でした。(今年の支援カンパは別記参照。)何とかいろんな方策を考えてこの事態を打開していきたいと思えます。

今後とも、どうぞご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

<今年取り組んだこと>

- ① チェルノブイリ支援・交流～ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリとフクシマを結んで
 - ・チェルノブイリ被災地訪問 (4回)
 - ・チェルノブイリ・ヒバクシャとともに、ヒロシマ・ナガサキ交流、フクシマ被災地訪問 (8月4日～8月13日)
 - ・チェルノブイリ事故32周年の集い (4月15日)
 - ・ノボ・キャンプ支援 (7～8月): クラスノポリエの子供たち5人がキャンプに参加
 - ・発足27周年の集い(12月9日)
 - ・救援バザー: ベラルーシ民芸品、手作りケーキなどを各地の集会で6回
- ② フクシマ支援・交流、フクシマを伝える取り組み
 - ・福島訪問 (3月16日～3月19日): 4名の訪問団
 - ・「保養キャンプ」への協力・交流など
 - ・「放射線のホント」撤回、福島原発事故関連要求の政府交渉参加 (呼びかけ団体の一つとして)
 - ・「放射線のホント」撤回全国署名への協力
- ③ 諸団体と協力して脱原発にも取り組む
 - ・さよなら原発 関西アクション (3月11日)
 - ・チェルノブイリ事故32年・反原子力デー/関電申し入れ
 - ・「戦争はいやや! 核なんかいらへん! フェスティバル 2018」(反核フェス) 出店 (10月28日)
- ④ その他、ニュース発行など

<来年の取り組み (提案) >

- ① チェルノブイリ支援・交流～チェルノブイリとフクシマを結んで
 - ・チェルノブイリ事故33周年の集い (4月21日)
 - ・現地訪問: 福島からの参加、保養関係視察、等々も検討
 - ・救援バザー
- ② フクシマ支援・交流、フクシマを伝える取り組み
 - ・保養キャンプへの協力
 - ・フクシマ視察・交流
 - ・9団体よびかけ・対政府交渉: フクシマ支援・ヒバク反対・再稼働反対
 - ・「放射線のホント」撤回全国署名に協力
- ③ 脱原発
 - ・さよなら原発 関西アクション (3月9日) ・反核フェス 等々
- ④ 「フクシマ10年・チェルノブイリ35年」に向けて
 - ・3年後に向けて…現地 (チェルノブイリ、フクシマ) との意見交換を進める

チェルノブイリ被災地を訪問・交流の報告

「救援関西」のチェルノブイリ支援・交流を続け フクシマからチェルノブイリへ～ヒバクシャを結ぶ旅

【例年どおり救援関西からの支援をベラルーシのチェルノブイリ被災地に届けました】

すでにお知らせしましたように、2018年10月17～22日、事務局の振津が、松川さん（モスクワ在住・通訳）とともに、ベラルーシの汚染地クラスノポリエとチェリコフの学校・幼稚園・障がい者リハビリセンター・病院・子どもたちの社会保護施設など、また、ミンスク・マリノフカ地区の「移住者の会」を訪問し、「救援関西」としての支援を届け交流してきました。そして10月26日から始まる福島からの「訪問団」（角田さん・県教組委員長、中村さん・石川町町議、佐藤さん・檜葉町民）の視察・交流の受け入れ準備と打ち合わせを行いました。また、モスクワでは、



暖房器具カバー

ロシアの汚染地ノボジプコフのNGO「ラディミチ」の元代表パーベルさんともお会いして、「福島訪問団」の視察・交流の打ち合わせもしました。

今回ベラルーシに届けた支援の会計は別記の表（23頁）のとおりです。皆様のご協力のおかげで、なんとか前年と同額の支援を各所に届けることができました。ご協力ありがとうございました。クラスノポリエの子ども障がい者センターでは、「施設の安全強化」ということで、部屋に備えられている暖房器具に子どもたちが触れて火傷しないように防護網を設置することが今年から義務づけられたそうですが、「国から指示は来るけど、予算は出してくれないのです…」と資金繰りに悩んでおられたようで、私たちの今年の支援金で「防護網」が購入できると先生方が喜んでくれました。またギムナジウムでは、「子どもたちの体力強化のためにスポーツを奨励しています。体育の先生と相談して、今年は子どもたちに新しいスキー板と靴を購入したいと思います。」とのことで、後でお礼のメールと写真が届きました。



また、学校では夏にノボ・キャンプに参加した子どもたちに「感想文」を書いてもらうように先生にお願いしたところ、次に福島の皆さんと一緒に訪ねた時に子ども

たちが作文を書いたノートや綺麗に飾り付けした冊子などを持って会いに来てくれました。皆、ノボ・キャンプで楽しい思い出を沢山作ってきたようすでした。（作文は、ボランティアの学生さんが翻訳作業中ですので、次号でご紹介したいと思います。）

移住者の会のジャンナさんは、福島から佐藤さんたちがベラルーシに訪ねてきてくれることを心

待ちにされていきました。故郷のナローブリアの案内準備、ミンスクでもベラルーシの歴史とチェルノブイリや日本に縁のある場所を案内したい…と思いめぐらして計画を立ててくれていましたが、打ち合わせの段階で、ジャンナさんが日程を勘違いして予定より一日多いと思い込んでいたことがわかり、大慌て…でもせっかくなので全部見てもらいたい…と、一日短い日程に当初の予定のほとんどを、なんとか詰め込むことになりました。（「福島訪問団」の皆さん、ハードスケジュールほんとお疲れさまでした。）

【フクシマからチェルノブイリへ～ヒバクシャを結ぶ旅のはじまり】

10月26日、松川さんと一緒にモスクワ空港で福島の3人を出迎えました。無事に入国審査を通過し、ちゃんと荷物を持って出てきてくれるだろうか…ちょっと心配しながらゲートの外で待っていたところ、長旅に疲れた様子でしたが、元気そうな3人の姿を見つけ、まずはホッとしました。いよいよ福島の方々とともに「救援関西」のコーディネートで初めて取り組んだ、チェルノブイリ被災地訪問・交流「ヒバクシャを結ぶ旅」の始まりです。

フクシマ事故後「救援関西」では、ベラルーシ、ロシアから、医師、教師、NGOのメンバー、移住者など、6回にわたり、チェルノブイリ被害者の方々とともに福島の被災地を訪問し、福島事故被害者の方々と交流してきました。その時に福島で、いつも中心になって受け入れて下さったのが檜葉町の佐藤龍彦さんでした。なので、まずは佐藤さんに現地訪問をしてもらえれば…と思ってこれまでも何度かお誘い打診していたのですが、佐藤さんも7年間にわたる避難生活を強いられ、思いはあってもなかなかチェルノブイリ訪問に出かける気持ちの余裕もなかったようで…やっと今回の訪問が実現した次第です。佐藤さんの声かけで、角田さん、中村さんが参加ということになりました。なぜか一番若い角田さんが「訪問団長」に「任命」され、訪問先での挨拶などを主にされていました。

ロシアとベラルーシの被災地を、飛行機、車、夜行列車での移動も含めて10日間の「駆け足」で巡るという、ハードな旅でしたが、「これまでに福島に来てくれて会ったチェルノブイリ被災者の方々全員と現地で再会したい」という佐藤さんの希望も叶えることができました（亡くなったバーリャさんを除いて）。そして社会主義ソ連で起こったチェルノブイリ事故、その後のソ連崩壊に伴う社会の変化、経済的困難、等々の中での30年余を「生き抜いて来た」チェルノブイリ・ヒバクシャの友人たちの様々な体験や思いの一端に直接に触れて頂けたのではないかと思います。同時にいろんな「宿題」も持ち帰りました。今回の訪問を、今後のフクシマの皆さんの活動、さらにチェルノブイリとフクシマを結ぶ、私たちの取り組みに繋いでいきたいと考えています。（次ページの旅程表と地図をご参照下さい。）

12月9日の「発足27周年の集い」では、佐藤さんを大阪にお招きし、訪問報告をして頂いたのですが、時間の制約もあり、また「まだ頭の整理ができていない」とのこと、佐藤さんの思いも十分には語って頂けなかったのではと思います。この度、「ジュラーヴリ」に何回かに別けて訪問の感想と報告を寄稿して下さることになりました。また、角田さんも感想を投稿して下さいました。ぜひお読み下さい。

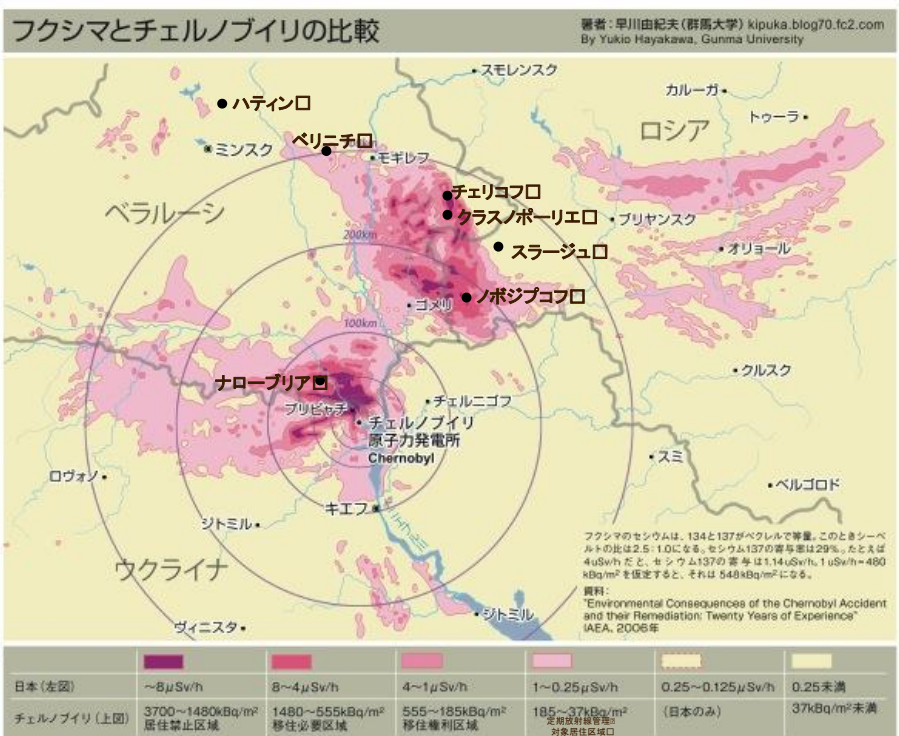
「救援関西」事務局・振津かつみ

「福島訪問団」視察・交流訪問の日程：

		移動		宿泊	
1	10月26日	金	成田ーモスクワ(空路) 空港ーホテル(車)	12:15 成田発 16:05 モスクワ(シェレメテボ空港・ターミナルD)着松川+振津出迎え	モスクワ泊
2	10月27日	土	ホテルーキエフ駅(徒歩) モスクワーノボツィブコフ(寝台)	「ロシアの声」(旧モスクワ放送)記者のリュウダさんの取材 モスクワ観光、22:28 モスクワ発(キエフ駅)	車中泊
3	10月28日	日		9:25 ノボジブコフ着、アントン出迎え ノボジブコフ市内のチェルノブイリ記念碑見学/ラディミチ訪問:パーベルさん(ラディミチの設立経緯など)、カーチャさん(放射線教育についてなど)話を聞く/ノボ・キャンプ(非汚染地スラーシュにある保養キャンプ)に向け出発/途中でクリンツィの記念碑、郊外の村などに立ち寄る/夕食後、ノボジブコフに戻る	ノボジブコフ泊
4	10月29日	月	ノボツィブコフーモスクワ(寝台)	ラディミチ見学、村の学校訪問/街のジムナジウム訪問(角田さんの授業「フクシマの現状」)/衛生局(放射能測定)、元事故処理作業者との会談/医師と会談/18:31 ノボツィブコフ発	車中泊
5	10月30日	火	モスクワーミンスク(空路)	6:02 モスクワ(キエフ駅)着、タクシーでシェレメテボ空港へ移動 12:20 モスクワ発、13:50 ミンスク着、ジャンナさん出迎え/チェルノブイリ博物館見学/ジャンナさん宅で「移住者の会」の活動について話を聞く	ミンスク泊
6	10月31日	水	ミンスクーナローブリア(車)	早朝、ナローブリアへ移動/屋前にナローブリア着 区役所・表敬訪問/衛生局(放射能測定)/病院/学校	ナローブリア泊
7	11月1日	木		汚染ゾーン(ジャンナさんの生家、試験的養蜂・馬の飼育など見学) ゾーンに隣接するキーロフ村の学校を見学/クラウドディア訪問・夕食	ナローブリア泊
8	11月2日	金	ナローブリアークラスノポリエ(車)	早朝、ホテル発/クラスノポリエに移動 教育局・表敬訪問/ソースチカ幼稚園、小児障がい者センター/成人の障がい者センター/博物館/衛生局(放射能測定)/夕食会	クラスノポリエ泊
9	11月3日	土	クラスノポリエーミンスク(車)	ジムナジウム(放射線教育についてなど)/学校(生徒たちの発表、角田さんの「フクシマ事故について」の報告)/ペーラさんお見舞い ミンスクに向けて出発/途中でベリニチ(障がい児・寄宿学校)見学 夕刻、ミンスク着	ミンスク泊
10	11月4日	日	ハティン、ミンスク市内(車)	ミンスク郊外:ハティン村、野外民族博物館/市内:チェルノブイリ礼拝堂/日本(仙台)スクエア/教会(長崎の鐘、福島土がある)/お土産・バザー用品買物/ジャンナさん宅で「移住者の会」のメンバーと交流	ミンスク泊
11	11月5日	月	ホテルーベルラドー空港(車) ミンスクーモスクワ(空路) モスクワ発(空路)	ホテル発/空港に向かう途中でベルラド(民間放射能研究所)見学 14:40 ミンスク発/16:00 モスクワ着/ロシア再入国/19:55 モスクワ発	機中泊
12	11月6日	火	成田着	11:40 成田着	

訪問したチェルノブイリ被災地

モスクワはチェルノブイリ原発から北東に約 500km



改訂版 2011年12月9日(初版4月15日)
この地図の作成には、文部科学省科学技術振興補助金「インターネットを活用した情報共有による新しい地学教育」(番号23501007)を使用しました。
地図提供: 振興地学子(TUBS@gnss.ac.jp)

チェルノブイリ原発事故の汚染地を訪ねて～視察・交流訪問記

佐藤 龍彦

2018年10月26日から11月6日にかけてチェルノブイリ原発事故汚染地であるロシアとベラルーシを訪れ、視察・交流を行ってきました。角田政志（福島県教職員組合委員長）を団長に、中村孝太郎（石川町議員）、それに、私、佐藤龍彦（避難居住地域・楡葉町住民）が参加し、「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の振津かつみさんのコーディネートと案内の下、事故後32年を経たロシアの汚染地域ノボジプコフ、ベラルーシの汚染地ナローブリア、クラスノポーリエを訪ねました。通訳はロシアのモスクワに住む松川直子さん（兵庫県出身）。ノボジプコフでは現地のNGO「ラディミチ」のメンバーが受け入れ、またベラルーシでは、ミンスクの「移住者の会」代表のジャンナさんが同行しました。

今回の視察・交流の目的は、1986年に起きたチェルノブイリ原発事故から32年を経た今日、未だ広範囲に汚染地域が現存している被災地の人々の暮らしや健康がどのような状況なのか、国の補償制度や行政の対応がどうなのか、これからの福島、原発事故被害者にどう活かすことができるのか、チェルノブイリの汚染地域を訪れ、直接に被害者と触れ合いながら、活きた教訓に学ぶことが第一義でした。

併せて、チェルノブイリの被害者との連帯を築く契機としました。長年にわたる支援・交流活動を重ね、チェルノブイリ被害者との信頼関係を築いてきた「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」（「救援関西」）の仲介で、フクシマ事故後、チェルノブイリ被害者が幾度となく来日し、福島を訪れる度に励ましを受けてきました。8000^{キロ}も離れた異国の地から来たチェルノブイリ事故被害者と、たとえ言葉や文化が違ってても、触れ合うことで、福島の被害者と相通じる体験や汚染地の有様を共有してきました。そして「チェルノブイリ後」、「フクシマ後」とも言われる核被害の理不尽さを共有し、全ての営みを遮断し破壊した不条理を二度と繰り返してはいけないという決意を共にしてきました。その決意を再確認する今回の視察・交流は、一過性に終わることなく、2021年のフクシマ事故10年、チェルノブイリ事故35年の節目に向けて、核のない平和な世界に向けて、連帯する絆をさらに深める契機とすることも目的としました。

<全体の感想～繋がりや信頼の大切さを学ぶ旅、フクシマの今後に活かしたい>

福島原発重大事故から8年目、甚大な被害の下でなす術もなかった時期から、ようやく被害の実相を冷静かつ客観的に捉える事が出来つつあるなかで、国や行政がすすめる「復興」のあり方や、長期に亘る廃炉作業に携わる労働者や放射能に汚染された地域に住む被害者の健康不安や生活再建に、例えようもない不安を抱えるなかにある現状を踏まえたときに、遅きに失した感はありますが、チェルノブイリ汚染地を訪れ、直接視察し、被害者と交流ができた意義は大きい。視察のコーディネートをした振津さんはじめ「救援関西」、関係者の皆様に感謝を述べたいと思います。

感想の第1は、若い人たちが活動の担い手になっていることです。「ラディミチ」が運営するノボ・キャンプ、放射線教育の担い手、そしてベラルーシでの行政や医療機関、福祉施設、教育機関の関係者など、その多くは20歳～30歳代の若者が活動の中核を担い、生き活きと活動しているように見えました。しかも、歴史や文化、習慣の違いかもしれませんが、客人に対するもてなしや

気の使い方、迎える準備も含めて気遣いが良く伝わってきました。誰一人、目をそらすことなく正面からちゃんと対応できることに感心しました。年配者が若者の主体性を尊重しそれとなくサポートしている姿も垣間見ました。

第2は、チェルノブイリとフクシマの共通性と相違性を感じ、実情の受け止め方の整理が必要であると思えたことです。フクシマでは福島原発事故被害の「幕引き」が急速に強まっていますが、チェルノブイリでは長期に至る政策の継続が実行されています。その要因とその背景は何か、またチェルノブイリとフクシマの共通性は何か、それらを整理する必要性を実感しています。「フクシマはまだマシ」といわれることへの疑念、責任の所在や被害者の明確化、法律や制度で補償するしぐみの違い、慣習化している子どもたちの保養、年金（被害者への支給年齢の引き下げ）・医療（検診の義務、無料）・教育（放射線教育・無料）・放射線モニタリング、食品放射能検査の継続など、チェルノブイリで行われている施策を精査して、フクシマの今後に活かすことが必要です。

第3は、チェルノブイリとフクシマが繋がるように努力することの重要性を痛感した視察・交流でした。繋げ繋がる努力は並み大抵ではありません。確信した信念に基づき、ひたむきに被害者と向き合いながら、共通する目的に向けて視察、交流を繰り返すしかないのです。1991年以降、交流・支援を続ける「救援関西」の無償の活動は、チェルノブイリ被害者の心に響き信頼を築きあげています。今回の訪問で私は、「ラディミチ」のパーベル、アントン、カーチャ、「移住者の会」のジャンナさん、クラスノポリエの医師のベーラさんなど、これまでに福島を訪れてくれた人々との再会を果たすことができました。繋がりと信頼の大切さを学ぶ旅でもありました。

最後に、ユーラシア大陸に広がる母なる大地は、遥かなる療原の彼方まで見晴らし、ときおり林立する白樺と松林の白と黄色、緑ののどかな風情には、なんとも言えない豊かさを味わいました。第二次大戦の惨禍とチェルノブイリ原発事故被害を重複して捉えるベラルーシ市民。博物館や記念館に陳列された遺品や、地域毎に建立してあるチェルノブイリ碑を見学するたびに、想いを走る複雑な心境にとらわれ、歴史に翻弄され為政者の犠牲となる市民や被害者を思うと泣けてきます。チェルノブイリ原発事故から32年、事故とその被害の歴史は確実に若者、子どもたちの記憶に残され「忘れられることはない」でしょう。

以下、今回は途中までですが、チェルノブイリ被災地の視察、交流を報告します。

<モスクワでの一日～ロシアのラジオ放送記者から取材を受ける>

第1日目は移動日、翌日からの視察、交流日程の確認と準備をしました。その合間にソビエト社会主義国に馴染みのあった「モスクワ放送」、ソビエト崩壊後は国営の「ロシアの声」ラジオ放送局から取材を受けました。記者のリュードさんは日本語が堪能で、何度も日本を訪れています。「救援関西」とも信頼が深く、福島原発事故のこともよく知っている的確な取材を受け、「大震災、原発事故時の状況」「被害者支援のあり方」「ロシアの原発推進への意見」など尋ねられました。リュードさんは、福島原発事故後の現状を伝える重要性を訴えていました。ロシア人記者からの思わぬ取材に心強く感じ、今回の視察、交流の目



「ロシアの声」ラジオ記者のリュードさんからインタビューを受けた

社会主義国に馴染みのあった「モスクワ放送」、ソビエト崩壊後は国営の「ロシアの声」ラジオ放送局から取材を受けました。記者のリュードさんは日本語が堪能で、何度も日本を訪れています。「救援関西」とも信頼が深く、福島原発事故のこともよく知っている的確な取材を受け、「大震災、原発事故時の状況」「被害者支援のあり方」「ロシアの原発推進への意見」など尋ねられました。リュードさんは、福島原発事故後の現状を伝える重要性を訴えていました。ロシア人記者からの思わぬ取材に心強く感じ、今回の視察、交流の目

的及び日程、内容を話しました。

その後はモスクワ市内観光。松川さんの案内で、一行はモスクワ名物の地下鉄（メトロ）に乗り、赤の広場やクレムリンを散策、モスクワ市民の暮らしや文化、歴史に触れながら Gum・デパートでは、琥珀品や民芸品を見て歩きました。かつてのソ連時代のモスクワとは一変している様相を垣間見ましたが、スターリン式建築やロマノフ王朝の帝政時代から綿々と続く寺院や建造物が立ち並ぶ市の中心を流れるモスクワ川の雄大さは、大国であった昔日の影を偲ばせるものでした。ロシア料理の「ボルシチ」それにアイスクリームの美味しさは格別でした。また、可愛らしい子どもたちの姿にも自然と目が向いてしまいました。



赤の広場を散策する3人

<ロシアの汚染地ノボジブコフに到着～チェルノブイリの碑の前で>



戦争で息子を失った母の悲しみ「女性の嘆き」像



二日目、前日夜キエフ駅から寝台夜行列車に乗った一行は、約11時間を要して汚染地域の街ノボジブコフに着きました。「救援関西」が交流と協力を深めてきたNGO「ラディミチ」の代表のアンドレイはじめアントン、パーベルさん等が駅まで出迎え、その日の宿泊ホテルに直行。ホテルではカーチャとも合流し再会を喜び合いました。朝食後、視察初めに市内の川のほとりにある「チェルノブイリ記念碑」を見学しました。碑の説明は、カーチャの息子（15歳）アレクセイ。息子を戦争に送り出したが帰ってこなかった母親の顔を表した「女性の嘆き」の碑は、元々チェルノブイリ事故の高汚染のために村民が移住を余儀なくされ廃村になったスビャツク村に建立してあったものが、移住した村民の願いでノボジブコフに移されたとのこと。スビャツク村は1000人くらいの人口のある大きな村だったのですが、事故後、若い人々から次々に村を出て行き、最終的に数十人の高齢者が残されたそうです。「ラディミチ」の若いボランティアは、残った高齢者の生活を助けに行ったりしていたそうです。「移住

した人々は、慣れない土地でストレスを抱えて早く亡くなった人も多かった。あるお年寄り『古い木の枝を新しい木に接ぎ木してもちゃんと育たないのだよ』と言っていた。」と、パーベルが話

してくれました。

その碑の正面下に事故処理作業員（リクビダートル）の小さな碑がありました。ノボジプコフにもチェルノブイリ事故の後の事故処理に参加した人々が130人位いたそうです。「女性のなげき」の碑を移転させた時に彼らは「亡くなった仲間のためにチェルノブイリの碑も作ってほしい」と市に求めてできたそうです。碑にはベラルーシの無名詩人の詩が刻されていて「チェルノブイリが起こった時に国が崩壊した、再び戦争が起こったようだ…」と、記されているそうです。カーチャが準備してくれた真っ赤なカーネーションの生花を一人ずつ碑に供えました。

＜ラディミチの創設者パーベル～汚染地で生きる決断をし、若者と始めたボランティア活動＞

午後からは「ラディミチ」の活動拠点となっている建物（元々幼稚園だった場所を借り受け、事務所、若者センター、チェルノブイリ情報センター、障がい児のリハビリセンター、甲状腺検診室等様々な部屋があり、活動の拠点となっている）で、「ラディミチ」の創設者パーベル（現在66歳）から、組織の立ち上げから今日に至る活動の経緯を聞きました。熱く語る積み上げた活動への誇りと意義ある成果の報告に、終始圧倒されました。パーベルの話は、以下のようなものでした。

「1986年に起きたチェルノブイリ原発事故時は34歳、教育専門学校で教鞭をとり15歳から19歳クラスの子どもたちを教えていた。ノボジプコフ市はチェルノブイリから180km離れた地にあったが、北東に吹く風に乗って運ばれた放射能が人口の密集するモスクワに届くのを避けるために、その手前で軍の飛行機によって意図的に放射能雨を降らせた。人々に知らせることはなかった。まだらにホットスポットができた。汚染地に残るか移住するかを迫られた。（注：ノボジプコフ市は、1991年に制定された「チェルノブイリ法」でも「退去（移住）対象地域」に相当する高汚染地域[セシウム137で555kBq/m²以上の汚染]であったが、人口約4万人を抱え、経済的理由等でほとんどの住民が移住せずに住み続けた。）移住しないのであれば、なにかを為すべきであり、私は社会的に弱い立場に置かれている人々を支援するべきだと思った。一人暮らしの老人、子どもたち、障がい者等の支援を自分の教え子の生徒たちと一緒に実施するなど、さまざまな取り組みを事故後5年間行ってきた。」「当時、ノボジプコフでもモスクワの中央政府を批判する集会などが度々開かれた。人々は演壇に上がって演説をぶったが、地域の問題を自分たちで具体的に解決しようとはしなかった。私は、試行錯誤の末にこのような『集会』をやっているだけでは何も解決できないと悟った。自分たちで行動しないといけないと思い、若い人たちと一緒にボランティア活動を始めたことがラディミチ創設につながった。」

「NGOとしての活動を続けるには資金が必要だった。資金援助を求めて何十通もの手紙を書いた。1991年のソビエト崩壊後、政情不安と経済困難に陥ったロシアの国内からは支援は得られず、国外の団体にも支援を求めた。ドイツの民間団体『プロオスト』の支援を受けて、コンピュー



熱く語る「ラディミチ」の創設者パーベルと堅く握手

タークラブを作り、地域の子どもたちにパソコンの使い方を教えた。(当時、パソコンが自宅にある家は、ほとんど無かった。) 93年には、ドイツの医師や専門家との交流を行い、身体障がい者へのリハビリ治療と指導も始めた。ロシア国内だけでなく、ウクライナやベラルーシの子どもたち毎年380人～400人が「ラディミチ」のリハビリセンターを訪れている。その後、古い保養キャンプ場を借り受け、若いボランティア活動家や専門家と一緒に改修し、子どもたちの夏キャンプ『ノボ・キャンプ』を始めた。教師や医師をめざす若い人々は、自分たちの未来に役立つ活動ができるので喜んでボランティアとして参加するようになった。重度障がい児のための『学校』もしばらくは運営していた。甲状腺検査もエコー検査機器をドイツの団体からの支援で導入して開始し、すでに1万7千名のデータを集積している。住民が自分たちで受診し、甲状腺に問題が見つければ、地域の医療機関にデータを送り治療に役立てている。カーチャは地域の子どもたちに放射線教育を行っている。ラディミチの地道な活動が国内外から認められ、国連からも注目され、その支援・協力を受けて、ウクライナなど他の地域からの研修を受け入れたりもした。」

パーベルは私たちの率直な質問に快く応えてくれました。私は、福島の実験に重ね合わせて、被害者救済については志し半ばの現状であり、汚染地域で暮らす子どもたち・障がい者へのケアなど福島の被災地域の現状と課題について話しました。意見交換し、つながりを持ち共有する課題に取り組んでいくことが大事だという思いを共有しました。「私は福島第一原発から20km圏内から避難して、7年目余りで自宅に戻った。パーベルが高汚染地に残る決断をして、そこに残る意義を見だし、その後の活動を続けてこられたことに感銘を受けた。私も『帰る、帰らない』の選択肢があるなかで、帰るからには同様の覚悟がいると思ってきた。檜葉町も高齢化と廃炉の街、健康懸念が深刻な状況で何ができるのか、パーベルに学び、実践を通して原発事故被害者同士の連帯、友情を深め合いたい。」と、今後の決意とつながりへの希望を私は述べました。また、「訪問と友情を記念して、次回は日本の『桜』を持参し植樹したい」との約束もしました。2016年の春に来日したパーベルさんは、福島の桜を見てとても気に入り、「ノボジプコフでも桜を植えたい」と言われていたので、とても喜んでくれたようです。

<元事故処理作業員のアレクセイさん>

「ラディミチ」の建物の一角にはチェルノブイリ原発事故の展示コーナーがあり、事故現場の様子や事故処理作業員（リクビダートル）の様々な写真や資料が展示されています。その中には「福島原発事故の展示」もあります。そこで、ノボジプコフで除染作業に携わったアレクセイさんを紹介されました。高齢のアレクセイさんは、当時の状況や福島事故被害者への想いを語り、健康で長生きするようにと心温まる言葉を受けました。リクビダートルに認定される対象者は、事故を起こした原発サイトの現場での作業員に限定されず、公益施設や道路の除染を行った軍関係者、家屋や庭、自家菜園等の除染を自主的に行った除染者もリクビダートルに含まれるそうです。つまりリクビダートルは、汚染地域で働く労働者すべてを指し、手当も支給されます。汚染地域の町に「碑」が建てられているのは、リクビダートルを社会的に認知し英雄視しているからに他なりません。



ん。82歳のアレクセイさんは、「タバコはダメだ」等々、健康長寿の秘訣を挙げ、とっておきの秘訣である「自家製葡萄酒」を持参して振舞ってくれました。

<ノボ・キャンプ訪問>

二日目の最後は、子どもたちが夏休み期間（6月～9月）を利用して保養をする「ノボ・キャンプ」のキャンプ場を見学しました。このキャンプはノボジプコフから車で1時間余の非汚染地域のスラージュという街の森の中にあります。温かい歓迎を受けて、スタッフから「ノボ・キャンプ」



地域の子どもたちとゲームをする若者センターのボランティア

（ロシア語で「新しいキャンプ」という意味）の施設内の案内、説明がありました。また会食を兼ねた交流を深めるなど、至れり尽くせりのもてなしを受けました。「ノボ・キャンプ」は、パーベルの息子のアントンを中心に1994年に立ち上げられ、汚染地域からこれまで多くの子ども達を受け入れてきました。教育大学の学生ボランティアも多く参加し、キャンプ期間中は医師も常駐し、マネージャー、厨房担当、清掃、建築を含む重層なスタッフ50名がキャンプを支えています。サークル活動などのカリキュラムも充実してい

て、通年を通した受け入れ準備を行い、子どもたちが生き活きと活動し学習する姿に、スタッフのメンバー一人ひとりが、歓びとともに、生きがいを感じていると話してくれました。

保養キャンプ場は、毎年150名以上の子どもたちを受け入れているとのこと。受け入れに費やすスタッフの献身性に驚くと同時に、社会に根づく保養の慣習に、ソビエト社会主義国崩壊前のピオネール時代から長く積み重ねてきた理念と経験を感じ取ることが出来ました。キャンプ場の片隅に、笑みを浮かべたレーニンが未来を約束するかのようピオネールの子どもの頭を撫でている銅像が残っていたのが印象的でした。会食でのロシア家庭料理は格別で、何度も乾杯を重ね自己紹介がてらスピーチが繰り返されました。友情の記念にと持参した飯館ラベル付き清酒と「おきあがりこぼし」を贈りました。最後に「子どもたちの未来」を表したラディミチのロゴマークのついたマグカップをいただき、再会を約束して乾杯し合いました。

非汚染地域にある「ノボ・キャンプ」までノボジプコフ市からは片道60km、道路は悪路が多く毎時110kmスピードで走るアンドレイの運転はかなり刺激的でした。途中車窓から見える村々の家並みは空家が多く、人々は村を離れて移住したと聞きました。村から離れて暮らす人々の想いを浮かべ、立ち止まって計った線量は毎時0.5～0.6 μ Svを示していました。線量計の数値がチェルノブイリ事故から32年を経たすべてを物語っていました。

広大な土地、母なる大地ロシアの風景は、既に暗闇のなか、帰途を急ぎました。

＜カーチャの放射線教育とチェルノブイリ情報センター＞

三日目、昨夜の余韻にひたりながら、昨日同様に「ラディミチ」見学から始まりました。チェルノブイリ資料センターの責任者を担うカーチャは、自らの経歴も含めてラディミチでの活動を報告してくれました。「私はウクライナ人。ノボジプコフ市にある教員養成学校を卒業してウクライナで教員をしていた。1997年にノボジプコフ市に戻り翌年からラディミチで働くようになった。学生時代に、汚染地域に住む老人や障がい者、子どもたちを支援するボランティア（ラディミチ活動）に関わっていたことが契機だった。

ラディミチではパーベルの助言を受け、子どもや障がい者に人形劇を上演してあげたりして支援した。養護の先生も手伝ってくれて、子どもたちが集うクラブを創った。様々なプログラムを工夫して企画し、子どもたちと一緒に楽しみながら支援をした。ウクライナに戻り結婚して子供を産んだが、いろいろとあって、またラディミチに戻った。子どもの健康問題や甲状腺検査で得たデータや資料を活かし学者や外国の専門家にも学んだ。データの検証のために汚染地の林にイタリア人と一緒に調査に出かけたりもした。」

「ラディミチ」での「授業」では、放射線教育を子どもたちに押し付けることなく工夫をして、子どもたち個々人が選択し判断できるよう教えているそうです。またチェルノブイリ情報センターを設け、チェルノブイリだけでなく、福島原発事故の状況や再生可能エネルギーの展示も行っています。また、地域の学校から放射線教育の依頼を受けて、学校を訪問したり、子どもたちの「ラディミチ」への視察を受け入れています。施設内では甲状腺検査も行われています。子どもたちが描いた絵の展示もあります。ドイツやモスクワの専門家や、原子力安全研究所との交流も実施し注目されているそうです。



「放射線教育」を実演してみせるカーチャ

＜脳性麻痺の子どもたちのリハビリ治療にも取り組む＞

「ラディミチ」のリハビリセンターでは、小児科、神経科の専門家が必要だったので、ドイツの医師団体から支援を受け始めたそうです。それまでも脳性麻痺の治療のための医療機関がはモスクワにはあったそうですが、経済的理由や受け入れ制限もあって治療が受けられない人々を「ラディミチ」で受け入れるようになりました。ここで行っている「ボイタ療法」という治療法は、手術や医薬品に頼らない整体師の治療法として研究・開発され、早期治療とリハビリを続け、家庭でも簡単なリハビリ治療を行なえるようにしたものだそうです。1995年にセンターをオープンしましたが、治療を受けた40～50%の身体障がい者に改善が見られ、今では専門の医師1名と整体師の5名のスタッフが、ロシア全土から訪れてくる患児たちの治療にあたっているとのこと。歩くことも出来なかった子どもが健常者と変わらないほどまでに治る例もあるそうです。治療費は「寄付」として扱い、個々の家庭の経済事情により柔軟に対応して徴収しているとのことでした。

＜「ラディミチ活動」を通じて若者が成長する力を感じた＞



身振り手振り、工夫して作った自作の原子核の簡単な模型を使いながら、汚染下で暮らす日常生活の過ごし方の注意などを具体的に子どもたちに説明するカーチャの生き活きとした姿に、団体の趣旨・目的に添う「ラディミチ活動」を通して若者が成長する力を感じ羨望を覚えました。改めて創設者のパーベルや現代代表のアンドレイに、訪問の受け入れに感謝しながら、持参した「赤べこ」などの手土産を渡しました。

＜農村部の学校訪問～移り住む当てもなく安全に気遣いながら住み続けた＞

その後も、視察日程は急ぎ足で続きました。ノボジプロフ市内にあるギムナジウム（中学校）を訪問し、8～9年生（日本の中学2～3年生に相当）を対象に、福島原発事故と被災地の現状を報告するプレゼンテーションを授業のひとつとして行いました。福島訪問団の自己紹介の後、角田団長が、原発事故状況をパワーポイントで写真を示しながら説明し、事故と被害を時系列に添い簡潔に報告しました。その後の生徒の質問はいずれも福島事故への関

心の高さを示すものでした。

この日の学校訪問は、市内の学校だけでなく、郊外の農村部にある学校にも案内してもらいました。白樺に囲まれた町はずれにある村の学校で、簡単な自己紹介の後、温かく迎えてくれた副校長に早速質問をしました。副校長は、「村の人口は300人。学校の教員、用務員は併せて12名、生徒は34人で1年生から9年生までを教えている。私は44年ここで働いている。ここは『移住の権利のある地域』だと言われたが、他の地域に親戚がいて引っ越した人もいたが、移り住む当てもなく村の人々はほとんど皆んな残った。移住してもうまくいかなくて戻ってくる人々もいた。除染し放射能を測りながら安全に気遣い、子どもたちを毎年保養に行かせ、今も年に3週間の保養は続けている。健康面が心配であるが、健康診断もやっている。家庭で栽培した作物を食べている。そうしないと生活できませんから。事故後数年は、きのこや川魚などは放射能を測定していた。自家菜園の作物はほとんど測っていない。また、放射線教育では、カリキュラムに従い指導している。」と誠実に応えてくれました。短時間でしたが、貴重な時間を割いて親切、丁寧に対応し、笑顔で見送って下さった先生と、学校敷地内の白樺の樹木から落ちる黄葉とがマッチし、まるで絵葉書を観るように美しかった。



ギムナジウムでフクシマの話しを熱心に聞く生徒たち

<事故直後に原発サイトで働き高線量の被ばくをしたリクビダートル>

昼食もそこそこに「ラディミチ」本部に戻ると、チェルノブリ事故時の事故処理作業員（リクビダートル）が待っていました。ニコライ・ツェリンコフさん、アナトリー・シャコバーボさん、アレクサンドル・ソコロフさんの三人で、いずれも60歳を超える年配者ですが、事故当時は20～30代の働き盛りであったと想定されました。

ニコライ・ツェリンコフさんは、「期間限定の予備軍人、汚染された水をフィルター等を使って除染し、プリピャチ川が流入する貯水湖に汚染水が流れないようにする仕事をしていました。また、黒鉛を屋根から原子炉に落とす仕事もした。15レントゲン(150ミリシーベルト)を身体に浴びた。」

アナトリー・シャコバーボさんは、「道路工事関係の工作部隊に所属していたのでダム建設に携わった。すでに軍隊に7年間所属していた専門職で、建設機械の管理等を行っていた。ダム建設の後には、原子炉の周辺で働く労働者の被曝防護のために、周囲に土を盛る作業もした。18.5レントゲン(185ミリシーベルト)を浴びた。」



アレクサンドル・ソコロフさんは、「1955年生まれ。世界初の重大事故だったのにソ連では『小さな事故』と報じていた。爆発した原子炉を消火するために30～40歳代の若い軍人、予備軍が投入された。事故後ノボジプロフでも臨時の召集部隊が編成され、医療、農業、文化事業など、あらゆる仕事をした。私は1986年6月に召集を受けて、冬になるまでに汚染水がプリピャチ川から下流のキエフ貯水湖に流れないようにする作業を行った。道路部隊1000人以上が動員され事業を達成した。軍

の命令で1日10～12時間も働くことがあった。

事故を起こした原発サイトの現場では防御服と鉄工所の作業員がかぶるような仮面と、線量計を着けて作業をした。チェルノブイリ原発の現場では金属性の甘い匂いがした。自分の健康のことをかえりみることは一切なかった。毎週、血液検査はしたが結果を知らされることはなかった。毎日、被曝線量を記録した。チェルノブイリでの作業から去る時には総被曝線量の証明書ももらった。私の被曝証明書には積算外部線量10.5レントゲン(105ミリシーベルト)と記されていた。

隣の1、2、3号機の建屋の屋根に飛び散った黒鉛を取り除く作業にも携わった。3分ごとに作業員を入れ替えて作業した。鉛の前掛け、ゴムの手袋、フィルターのついたマスクと仮面をかぶり、1分でサイレンが鳴った。屋根に上る前に線量計を渡され、作業終了後『8レントゲン(80ミリシーベルト)を浴びた』と言われた。でも低い数値を言われたと思う。なぜなら25レントゲン(250ミリシーベルト)を浴びると解雇されるから。1分で運べる黒鉛などの瓦礫は20kgくらいだが、人によっては30～40kgの瓦礫類を運んだ。全体で120トン。燃料や黒鉛の破片、瓦礫、金属片等を爆発した4号炉の原子炉に落とす作業に4000人が投入されたと言われている。ロボットは屋根から落ちて壊れて動かなくなったので使い物にならなかった。あの時の状況を忘れることはできない。自分たちは犠牲になったが、臆病ではなかった。事故もようやく9月末頃には落ち着いた。」

以上、事故当時の状況が生々しく話されましたが、私が「破局的な被害を止めた英雄」と称える

と、三人は、「軍関係者である由に、命令に従ったまで」と謙遜し、誇りはあるが「英雄」とは思っていないと応えました。「チェルノブイリ法」で手当は支給されましたが、インフレで貨幣価値が減り、生活は苦しかった。権利を守るためにノボジプロフのリクビダートルでこの地域の「チェルノブイリ同盟」（モスクワに本部のある「チェルノブイリ同盟」とは別組織とのこと）を創り、諸課題を国に要求して年金や健診、食品手当などを勝ち取ってきました。加えてアレクサンドル・ソコロフさんは、健康面では骨、循環器、眼に異常をきたし右目の失明により第3グループの身体障がい者に認定されているとのこと。右目を失った原因は「鉛を投げるときに原子炉を覗いたからだ」と強調されました。三人ともお元気そうに見えましたが、不眠、体の変調、症状の悪化と、事故処理作業の影響に健康不安を抱えていることが強く伝わった証言でした。

<定期健診と放射能汚染のモニタリング>

最後の交流は、ラディミチと係わりのある地域の病院で働いている内分泌医のエレーナ・ストーリナヤさんとエコー検査専門医のセルゲイ・オボドスキーさんでした。この地域では、毎年全員、国の政策として病院、職場、学校などで定期健診が行われています。それとは別に「ラディミチ」でも甲状腺エコー検診を二人の医師が交替で毎日行っていて、毎日10～20人くらいは検査するそうです。「ラディミチ」では午後に検査を行うので、仕事をしている住民も好きな時間に予約をとって受けることができるとのことでした。また、以前のデータもパソコンに残っているので前年と比較もできるそうです。この地域は内陸部なので、元々食べ物のヨウ素不足による甲状腺腫が多いそうです。その上に事故による放射性ヨウ素の汚染を受け、事故後には小児、成人の甲状腺ガンが増加したとのこと。（現在は、半減期の短い放射性ヨウ素の汚染はありません。）

また地域の衛生局も訪問し、食品の放射能汚染の測定（年間1000件くらいセシウム、90件くらいのストロンチウムも測定）や住民の被曝線量を30年以上経った今もモニタリングし、住民に注意を促している状況も見学しました。森のきのこでは、乾燥させると今も2500ベクレル/kgを超えることもあるそうです。

<次回は若者と一緒に訪問を…>

ノボジプロフ最後の夜となったこの日は、モスクワからベラルーシ（ミンスク）へと旅立つ前の晚餐が開かれ、ラディミチ代表のアンドレイをはじめスタッフが集まり篤いもてなしを受けました。



ウオッカと手料理のロシア馳走一杯を前に何度もなんども乾杯をしました。チェルノブイリ、フクシマを繋ぐ「きずな」を確かめ、今後の交流に活かす確かな感触を得る訪問になったと思います。アントンからは、「次は若い人々と一緒に来て下さい」と、大きな宿題ももらいました。その後、モスクワ行寝台列車に揺られること11時間、車中では相席したロシア人と意気投合し、楽しいひとときを過ごしながら眠りにつきました。

福島に取り組みに生かしていきたい

角田政志

今回の視察訪問は、今後フクシマの長期的な課題になるであろう、①被災住民に対する補償はどうなっているのか。②汚染地区に暮らす人々の生活と権利の保障はどうなっているのか。③放射線による被ばくに対してどのような対策対応がとられているのか。④子どもたちに対する放射線教育と保養などがどのように行われているのか。などを主な目的として行ってきました。

視察先は、ロシアとベラルーシの汚染地区の公的機関への表敬訪問を始め、幼稚園、学校、病院、障がい者施設、放射線測定施設（民間施設も訪問）、歴史博物館などの公的機関と、立ち入り制限地区内の村や森（許可を取っての立ち入り）、コルホーズ（農林業試験場）、さらには保養施設などで、それぞれの訪問先で、様々な話を聞いてきました。また、原発事故処理労働者や移住者の会の人たちとの懇談の機会もあり、貴重な話も聞くことができました。

今回の訪問で感じたことは、

- ① 被災した住民の生活権利の保障が、事故から30年以上たった今でも行われていることです。



ロシア「ラディミチ」のチェルノブイリ情報センターで。カーチャが持ち帰った「県教組・放射線教育対策委員会」編著の著書も展示されていた。

事故後、強制移住地区以外の汚染地帯に住んでいた人たちには、汚染の度合いに応じて、移住する権利、住み続ける権利が補償され、移住を選択した人にも、住み続けることを選択した人にも、国による補償がなされています。（チェルノブイリ法）

日本は、事故の当事者である国が、安全をアピールし、住民の帰還政策を進め、補償の打ち切りを進めています。国の体制の違いとはいえ、住民の権利が保障されず切り捨てられる今の日本の政策に対しては、異議を言っていかなければならないと感じました。

② 人々の暮らす汚染地区の町の線量は、概ねこの地域も、現在の福島市の空間線量よりも低いという環境でした。（森の中などには、多少線量の高いホットスポット的な場所もありました。）

ベラルーシでは、汚染地帯に住み続ける人々に対しては、今も健康診断が行われ（労働者にはホールボディカウンターを含む様々な検査が年1回義務付けられています。）、積算線量計による被ばく測定も行われていました。また、家庭菜園や森で採った

キノコや木の実（非汚染地帯の森のキノコや木の実等は日常的な食材として食べられています。）の線量検査も行われています。線量検査の結果は、公的機関が集計し、それぞれの州に報告され、さらにそのデータが国に集められ、国がデータ管理および公表を行っています。

福島では、「除染が行われた」「空間線量が下がった」として、放射線に対する警戒心が低くなっています。（あるいは、意図的になくされています。）米の全袋検査を抽出検査にする動きや、モニタリングポストの撤去の動きは、まさにベラルーシとは全く違い、まさに逆の方向に動いています。

③ 子どもたちに対する放射線教育は、事故から30年以上たっても続けられています。子どもたちにとって、チェルノブイリ原発事故は、歴史的な出来事となっています。(日本での広島・長崎の原爆と同じです。) 子どもたちには、チェルノブイリ事故があったこと、その事故によってどのような被害があったのかについて、成長段階に応じて学校で取り上げられています。

放射線教育は、授業で取り上げられる他に、実際に放射線の測定を行う、体験的な学習も行われています。子どもたちが持ち寄った「資料」(キノコや木の実など)を実際に線量を測る学習もなされており、子どもたちだけでも、測定をすることができる仕組みができていました。また、学校には、子どもたちが自由に参加できる様々なサークルがあり、その中に放射線に関するサークルなどもありました。子どもたちが様々な資料や文献を集めたり、実際に測定したり調べたりして、自分たちのオリジナルの研究報告なども作成し、パソコンによるプレゼンテーションなども行っていました。



「ラデミチ」の活動拠点の建物



ノボ・キャンプ



先生たちの話を聞くと、子どもたちは、機械操作には抵抗なく普通に放射線の測定を行っているということでした。また、住民、特に高齢者は、放射線に対する警戒心が薄れてきているので、子どもたちが放射線教育を通して学んだことを家庭で話すことにより、家庭での意識の低下、さらには周囲の人々の意識の低下を防いでいるということでした。また、次世代の子どもたちに対する被ばくのリスクを下げるためにも、やがて親となる子どもたちに放射線教育を行うことは重要だと話していました。

そのほかにも、様々なことを学ぶことができました。たくさんのことを見聞き、まだ整理し切れていません。日本との最も大きな違いは、被害住民の権利保障がまず行われているということです。社会主義時代の様々な国策の名残が引き継がれていると感じてきました。これから、今回の訪問をさらに振り返り、福島取り組みに生かしていきたいと思えます。



ラデミチのリハビリセンター

劇団「赤いトマト」関西公演

～「パツーツ！」「太郎と花子の物語」「ソラライズ」～

12月に、保養をすすめる関西ネットワーク有志のお世話で、なんともすてきな人形劇を関西で観ることができました。

今回は、原発が建てられてきた過程を表現する「パツーツ！」、原発事故によって苦難の道を余儀なくされた農家の夫婦を描く「太郎と花子の物語」、再生可能エネルギーの未来を展望する「ソラライズ」の3作品同時上映でした。

ひとりひとり、ずっと見ていたくなる手作りのあたたかい人形たち。布で作った森や花や家や水や風のかわいいこと。人々の日常生活・子供たちの毎日の中の大切なことが、クスッと笑いたくなる言葉のやりとりのなかに自然に入っていて、大人もお話の世界にすっと入り込んでしまいます。

3部作の1つめは「パツーツ！」でした。ほんわかしたタヌクんとウサちゃんの素朴な森の生活の中に、知らないうちに入り込んで、すべてを変えてしまう「パツーツ！」。花をつけた小さな顔の下に、笑顔の真ん中の顔、そしてその下に大きな怖い顔と体を隠した三段重ねのぬいぐるみ。原発？って人形にしたらこんなになるんだと、びっくり。裕福とはいえない生活の中で滅多に食べられないほっぺたが落ちそうにおいしい「オジェジェキャンデー」（銭？）をもらってるうちに、森の花は食い荒らされて、消えることのない毒がまき散らされていきます。



大河原多津子さんと大河原伸さんご夫婦は、福島県田村市で有機農業を行いつつ、1985年からは二人で県内の保育所や公民館で劇団「赤いトマト」として人形劇と歌の公演を行ってこられました。誰よりも食物の安全を大事にし、土地を大事にし、ここで5人の子供を育てたご夫妻は、福島原発事故後、作物の販路を失い絶望の淵にたたされました。

「チェルノブイリ事故をきっかけに原発反対の運動を始めていたけど、忙しい、嫁の立場、とだんだん後回しにしていた自分を責めている」子どものこと親のこと、多くの変化と決断を経て、今は農業の傍ら野菜とパンの店も立ち上げ、原発をテーマにした人形劇もつくり、思いを歌にして伝える活動を続けておられます。「誰も助けてはくれない」「なにが辛いと言ったって、大事な作物が毒かもしれないということ」「考えた末にここで農業を続けることにした」。説明すると難しく、なかなか伝わらない福島事故後の、等身大の、当事者の苦しみと選択が、劇と歌と語りでしみこんできました。

追伸。

日常の子ども向けの作品も、もう一つ観たかったです。またちょっと違う、大河原ご夫妻の伝えたい大切なこと・クスッと笑える楽しい話が、きっと入っている。

追追伸。

一度、三春町の大河原さんご夫妻のお店に伺いたいです。

由美

中村敦夫さんの朗読劇 「線量計が鳴る」 (2018年12月7日)

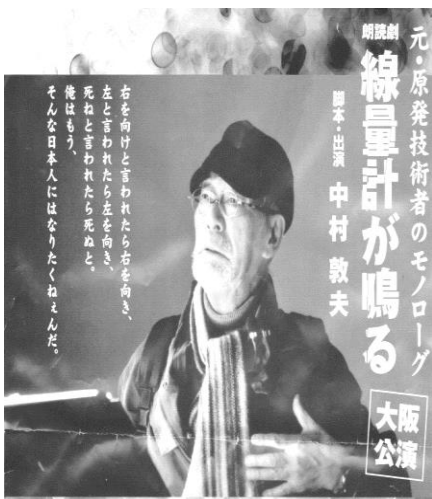
久保 きよ子

舞台が暗くなると、いきなりピーピーと、不気味な音が会場に響き渡る。

すると、舞台の袖から線量計を持った初老のおじさんが、「この話しすんのは、本当につれえわあなあー。でもなあー、どうやったって現実から逃れられねえ。双葉町で生まれ育った俺が こんたら目に遭うのは、運命なんだっぺか!？」と、語り始める。

中村さんは、戦中、戦後の少年期を東京から福島県いわき市に疎開した経験から、一人芝居を方言を交えて語る。

中村さんは配管技術師を演じる。



福島県双葉町で生まれ、東京電力福島第一原発で、配管技術師として働き、原発事故で全てを失う「男の物語」を淡々とつぶやく。

少々の不具合など無視しながら原発を運転してきたこと、安全に管理できていないことを上司に報告すると、俺が干されてしまったこと等々、信じていたことが次々と破られていく憤りを語り続ける。

途中10分の休憩時間があったが、2時間立ちっぱなしで、しゃべり続ける怒りが会場を覆う。中村さんもおんとし78才。この気力、体力を振り絞るのは、「原発をめぐるのウソ、ごまかしに心の底から憤る怒りの力だ」と語られる。すごい迫力でした。

その迫力は、観ている私たちにも共感を増幅させ、会場一帯となって、原発をすすめてきた東京電力、時の権力、現政権、原子カムラへの強い怒りとなって、わき上がって来るのでした。

「おかしい、おかしい」と思いながら脱原発で闘ったきた私にも、原発を止められなかった大きな後悔がこみ上がって来たのです。この朗読劇、もっともっと友人や知人と一緒に観たかったなあと思いました。もし、また、近くで上演会があれば是非、感激し、怒りを共有したいと思いました。

代表・山科さん 97歳おめでとございます！



1月27日は山科さんのお誕生日。運営会議に出席していただいた後、お祝いの昼食会を持ちました。

山科さんは変わらずお元気で食事もモリモリ、ほぼ完食。若い時の通訳の話をしてくださいました。白寿は盛大に祝おうという話で盛り上がりました。

会も終わりの頃、「サンキュー ヴェリマッチ！」と元気な声が響き渡り、隣のテーブルの含め、みんなが驚きと笑顔になりました。

会議に出席された山科さん。マーシャル土産の頭飾りをつけて



ご支援とご協力をお願い

いつもチェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西の活動にご協力いただき、ありがとうございます。本日はお願いがあり、厚かましいのは承知の上で、この文を進めております。

いずこともよく似た状況であろうと思われませんが、救援関西もなかなか会員さんの増加がかなわず、スタッフもお声掛けなどに努めていますが、ここ数年間は減少傾向で推移しています。それに伴い、寄せられる救援カンパも少なくなり、ベラルーシの被災地へ届ける支援を例年通りに続けるには不足が生じるようになってきました。スタッフの努力でなんとかここまで凌いでまいりましたが、これ以上の無理は利かない状態です。

このままでは、『顔の見える関係』を築いてきたベラルーシ被災地への支援を縮小せざるを得ません。もちろん支援の多寡によって現地の方々との関係が変わる訳ではありませんが、支援は私たちの気持ちを届けるという意味合いのものです。「皆さんが私たちのことを忘れずにいてくださることが励みになっています」とおっしゃるベラルーシの方々に向けて、支援を縮小すると伝えるのは、できるだけ避けたいと思っています。

上のような現状に鑑み、まことに恐縮には存じますが、これまでも増しての出来るだけのご協力をお願いする次第です。また、会員さんの増加につながるようなアイデア、活動の広報が可能な機会、救援バザー参加ができるイベント情報などなどもお寄せください。

「救援関西」は皆さまのご支援と協力で支えられて成り立っています。どうぞ、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西にお力をお貸しください。すよう、よろしく願いいたします。



カンパ・会費の納入ありがとうございました！

(2018.11.19~2019.1.29)

清水昭 佐藤龍彦 角田政志 中村孝太郎 高木祥吾 富田洋香 大西洋司 山下晴美 岡田仁
三田宜充 村田三郎 原発の危険性を考える宝塚の会 長沢由美 末田一秀 徳井和美
栗田千加子 熊沢滋子 石地優 (順不同・敬称略)



会計報告 (2018年1月1日~12月31日)

チェルノブリ支援 (子ども支援を含む)	収入	カンパ	719,275
	支出	ベラルーシ訪問/支援・交流 ジャンナさん福島等訪問	758,918 * 1) 251,695
小計			1,010,613
差し引き			-291,338
繰り越し			543,197
現在高			251,859

ベラルーシ保養支援	収入	カンパ	101,500
	支出	ノボ・キャンプ旅費支援	199,080
差し引き			-97,580
繰り越し			126,576
現在高			28,996

フクシマ支援	収入	カンパ	116,000
	支出	「ゴーワーク」(保養)支援 福島カンパ等	115,000 29,900
小計			144,900
差し引き			-28,900
繰り越し			250,951
現在高			222,051

運営会計	収入	会費・カンパ	200,000
	支出	紙・印刷・郵送・賛同金等	264,013
差し引き			-64,013
繰り越し			117,412
現在高			53,399

* 1) チェルノブリ資金支援

クラスノボーリエ	ソームチカ幼稚園	200	子ども障がい者センター	200
	学校	200	成人障がい者センター	200
	ギムナジウム	200		
チェリコフ	コロゾク幼稚園	300	ブラレスカ	300
マリノフカ	子ども元気	1,000	移住者の会	1,000
総計				3,600 \$
				1 \$ = 113 円
				406,800 円

*** チェルノブイリ事故 33 年集い
～チェルノブイリとフクシマを結んで～**

事故後からお母さんのグループ「3a! (安全・安心・アクション) in 郡山」を立ち上げ、様々な活動に取り組んでこられた元代表・野口時子さんをお迎えし、8年間の想いを伺います。

日時：4月21日 午後1時半～4時半

場所：大阪市立総合生涯学習センター／第1研修室(大阪駅前第2ビル／5階)

*** さよなら原発関西アクション
ー再稼働やめて！ 核燃料サイクル中止！ー**

日時：3月9日 13時開場 13時30分開演

場所：エルおおさか 大ホール

主催：さよなら原発 関西アクション実行委員会 (チラシ参照)



ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局
連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方
Tel : 072-253-4644
e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp
郵便振替:00910-2-32752
口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西